

島袋雄仁 「地元住民が築く、新しい観光」

私の古里である沖縄県は今、観光立県としての開発が進められ、海沿いに多くのホテルが建設されるようになった。近年、それに伴い観光客数は約 592 万人にまで増加、加えてアジア貿易の拠点とする機能拡張や格安航空の広がり、一層の交流人口増加を促している。一見、多くの人の来訪で多大な経済効果と市民生活への潤いを与えているように見える沖縄だが、果たして本当にそのような美談だけなのだろうか。本稿では、私の考える沖縄の観光産業の問題点を挙げ、独自の解決策を考察していく所存である。

現在の沖縄における観光客の内、約 38 万人は海外からの来訪者であることを考慮すると、海外の観光客をどう確保するかに焦点を当てる必要があると考えられる。またアジア人観光客が多い状況下で、どう欧米からの集客を増やすかということが沖縄の抱える課題の一つになると考える。その原因として、欧米に沖縄同様の風光明媚な海を観光資源とする地域が既に存在していることが考えられる。少し足を伸ばせば見える景色のためにどうしてもわざわざ沖縄に行く必要があるのだろうかと思われても仕方がないだろう。ここで、一旦前述の問題から離れ、もう一つの問題について考察していきたい。リゾート開発が進んだ地域周辺にホテルを筆頭に商業施設が建設されたことは周知であるが、これにより長年経営してきた民宿を始めとする古くから地元根付いていた商業施設が経営難に追い込まれた事、またそれにより集落から住民が消え、空き家が増えてしまったという事実まではあまり知られていない。本来ならその地特有の資源を活かし進めていくはずの観光がどこにもある普遍的なリゾート開発により失われてしまったのである。

そこで、これらの課題を解決する手段の一つとして、私は空き家を活用した長期滞在型宿泊施設を提供する事を提案する。これにより、地元住民と関わりが増え、食や音楽などを通じた沖縄独自の文化を伝える機会に繋がると考える。具体的な交流手段としては、空き家宿泊施設周辺に暮らす住民が、観光客に食を提供する事、食後に三線やエイサーと言った沖縄が誇る伝統芸能を堪能してもらおう等が考えられる。加えておもてなし側の人を集落に住む住民で構成することで、高齢化の進む地域において雇用創出が期待できると考える。これにより、ホテルで宿泊する人には体験できない地元住民との繋がりが生まれ、「あの人に会いたいから沖縄に行きたい」というような「人」という新たな観光資源を生み出すこともできる。新たな観光資源の発掘は他地域との差別化だけでなく、その地、特有の観光のあり方の再構築と地域の衰退に歯止めをかける可能性があると思測する。

最後になるが、私は沖縄における観光業の問題から論を展開してきた。ここでリゾート開発を進める事業には限界が見え始めたと言っても過言ではないと考える。これからは、地元住民にとっての日常を観光客に提供し、共有する「新しい時間の使い方」が求められるだろう。創られたおもてなしではなく、そこに暮らす人の自然なおもてなしが重宝される観光が訪れるのもそう遠い話ではないように思える。